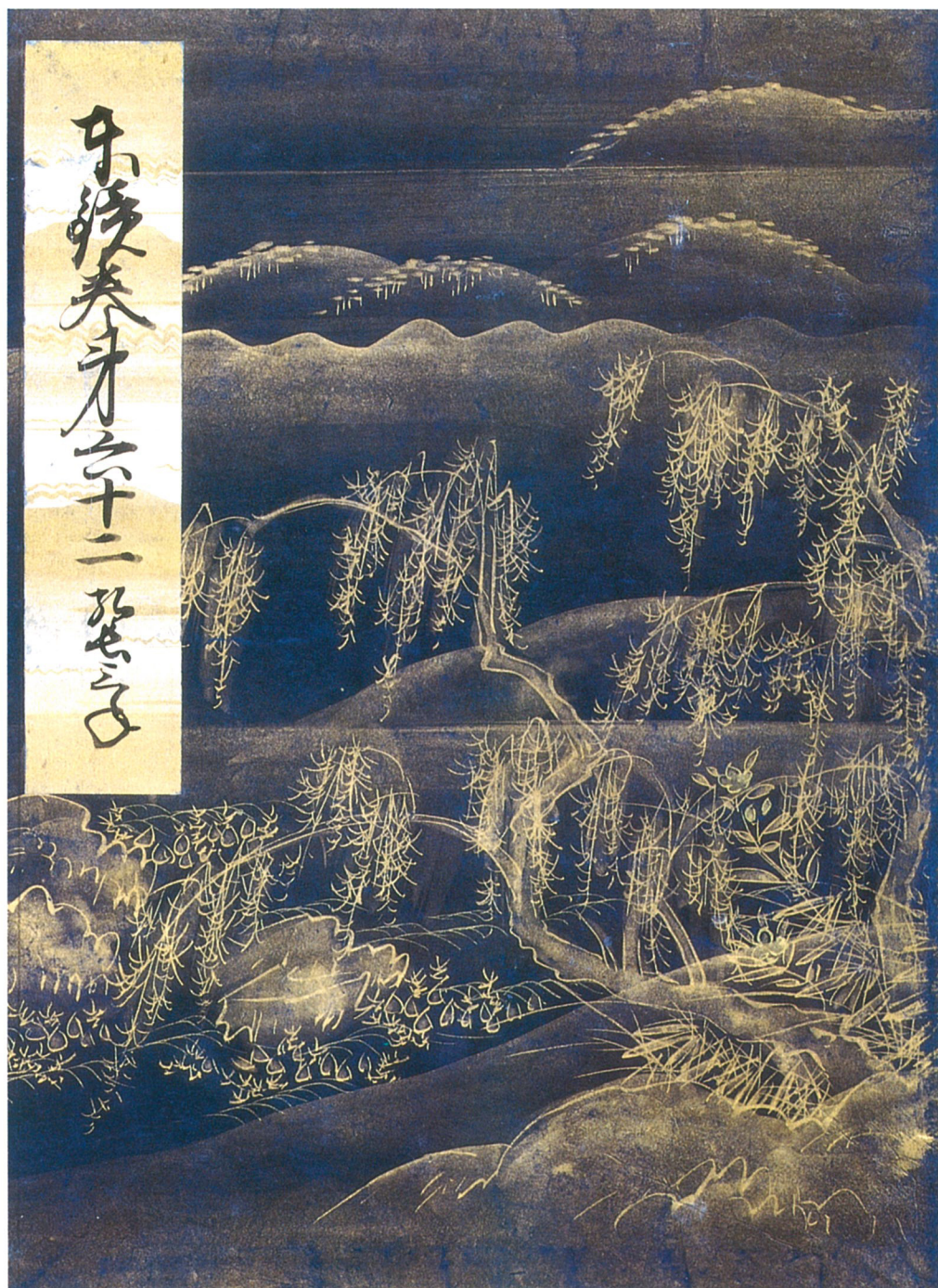




◆表紙さまざま 東鏡（解説八ページ）

蓬 左

HÔSA

名古屋市蓬左文庫

NO. 52

HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

尾張藩と尾張徳川家の編纂事業

III 地誌と地図

十月一日～十月三十日 十一月四日～十二月四日

IV 尾張徳川家維新史編纂所

一月十四日～二月十二日 三月一日～三月三十一日

◆地誌と地図

地誌や地図の編纂は、領主がその領土を確認する上で必要不可欠なものといえます。近世は官撰、私撰ともに各地で地誌の編纂が行なわれました。とくに各藩の藩政の確立とともに、藩撰による地誌がさかんに編纂されています。

尾張藩においても、最初に地誌の編纂が計画されたのは、一七世紀の末、三代藩主綱誠の治世でした。この時期は、まさしく藩政の確立期であるとともに名古屋における本格的学術研究の発生日でありました。初代藩主義直が、その文教政策によって築いた基礎が成果を発揮し始めた時期ともいえます。しかし、残念ながらこの編纂事業は、翌年の綱誠の死によって中止を止むことなく、未完のまま草稿のみが、御文庫に長く保管されていたようです。

綱誠の遺志をついで、藩撰地誌の編纂が再開されたのは、八代藩主宗勝の治世でありました。宝暦二年（一七五二）、数年にわたる編纂を経て「張州府志」が完成しています。この編纂においては、実地調査に重点が置かれ、現在においても地域研究の基礎資料として重要される優れた内容をもった地誌として評価されています。こうした優れた地誌編纂を可能とした背景には、宗勝による強力な文教政策と全国的に知られた学者が多数輩出した尾張における学術文化の開花期が重なった点にあることを見逃すこ

とはできません。一方、一八世紀半ばは、幕府が全国産物調査をおこなった時期でもありました。尾張藩でも領内全域で調査を行い、産物帳をまとめている。

ところで、こうした地誌の編纂は、中国の地誌を手本としており、多くが漢文で記されています。九代藩主となった宗睦は、「張州府志」の内容の補訂作業とともに和文への改訂を命じています。この事業は、十一代斉温によって本格的に着手され、弘化二年（一八四五）、「尾張志」として完成しました。この和文地誌については、当時飛躍的に発展した測量技術によって作成された地図以外は、新しい成果がみられないことから、「張州府志」の単なる和文改訂にすぎないという評価をえています。

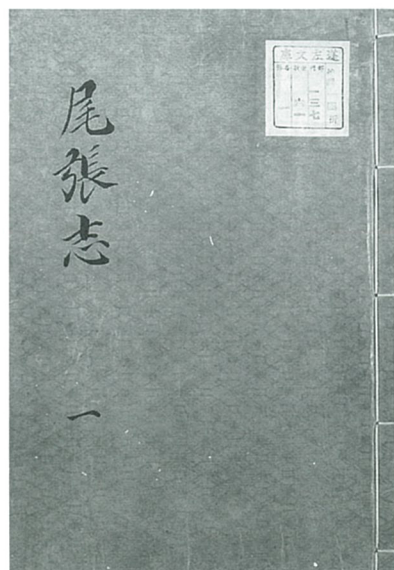
それは、この時期、藩主の交替が頻繁で編纂について強力な指導力が発揮されなかったことに負うところが大きいようです。「尾張志」の編纂については、決して新たな調査が行なわれなかったわけではありませんが、また、当時の尾張では、本居宣長学派の学問が盛んとなり、学界は活況を呈していました。

「尾張志」編纂の成果は、編纂にたずさわった人々による「尾張名所図会」をはじめとする「尾張志」の副産物ともいえる優れた私撰の地誌に反映されているといえます。

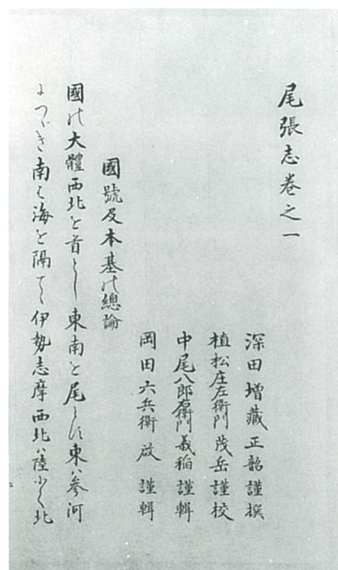
一方、藩による地図の作成は、多くが正保、元禄、

天保と幕府が全国諸藩に対して行なった国絵図の徴収と深い関わりを持って行なわれたようです。国絵図の提出に際し調査が行なわれ、多くの下書きや控、関連の地図が作成されたものと思われます。また、一七世紀半ば、防衛上の拠点となる領内の古城を詳細に調査したと考えられる古城図の一群が残されています。

地図の作成は領内を掌握する上で重要な意味をもっていました。藩自身が必要に応じ作成したものはこの他にも多数存在したと推定されます。しかし、政治、軍事上の色合いが濃いものだけに、現在の蓬左文庫に繋がる御文庫や、藩主の周辺が管理する資料のなかには、伝えられなかったもののようです。



尾張志 卷之一



尾張志 61巻61冊付図14枚
天保15年(1844) (29.8×20.5cm)



清須村古城絵図 江戸時代前期

1枚 (187.6×135.0cm)

17世紀半ばの清州城址(清州町大字清州字古城地)を描いた図。清須城は、応永年間に尾張国の守護である斯波氏の居城として築かれ、戦国から近世の初頭には、織田信長、信雄、松平忠吉の居城となった。尾張藩成立後も名古屋城築城以前の藩庁は、清須城であった。

蓬左文庫には、本図と同じく17世紀半ばころの尾張の国内18ヵ所の古城址を描いた図が所蔵されている。どれもかなり正確な測量により描かれており、尾張藩が防衛上の拠点として、古城址を把握するために、調査を行い、作成したものと考えられている。

参考 遠藤才文等「尾張国古城考」(「愛知県中世城館跡調査報告1」)



一九〇段（妻というものこそ）

書物箱 (26.5×20.0×10.0cm)



奈良絵本つれづれ草 江戸時代前期 (17世紀)

6冊 (23.5×17.3cm)



三代藩主綱誠の正室新君の蔵書である。綱誠との婚礼に際して整えられたものではなかったと思われる。

奈良絵本は、中世末から近世初期に御伽草子などを題材として作られた絵本で、江戸時代に入るとともに豪華なもの作られるようになり、装飾用の書籍として、婚礼調度のひとつにも数えられている。

本書は、幕末まで、新君の蔵書として御文庫に所蔵され、明治初年の処分をまぬがれて、蓬左文庫に受け継がれた。この他幕末まで御文庫が所蔵していた新君の蔵書としては、江戸時代初期の「宇津保物語」の写本と「忍寝」「岩清水物語」の古写本が現在も蓬左文庫蔵である。

尾張藩御文庫の蔵書——その2

三代藩主綱誠とその夫人たちの蔵書——

1、三代藩主綱誠の蔵書

御文庫、とくに名古屋城内二の丸にあった表御書物倉の蔵書は、旧蔵者つまり、歴代藩主、その嗣子夫人達などの別に分類され、管理されていた。前回紹介したように、御文庫の蔵書の確立期にあたる、義直、光友の時代には、数千冊、さらに万を超える蔵書が収集された。しかし、その後はすでに基本となる書物、いわゆる古典の類が整ったこともあり、一代で数千冊を超える収集はあまり見られなくなる。むしろ、収集者の個性や、その時代背景が蔵書にも反映されているといえそうである。

光友について三代藩主となった綱誠は、承応元年（一六五二）光友と將軍家光の娘であった正室千代姫との間に誕生、三十一歳で藩主となるが、四十八歳で没している。御文庫の目録には、綱誠の蔵書として五百冊から七百冊前後の書物が記録されているが、目録によっても、その内容や冊数に異動がみられる。綱誠の死去が、すでに隠居していた光友の存命中であったことが、光友と綱誠の収集書を区別しにくくしてしまったようだ。さらに、目録に記載された書物からは、あまり特徴が感じられない。ただ元禄十一年の將軍の尾張藩上屋敷訪問のために購入されたそれぞれ三〇件三〇〇冊におよぶ「四書」や「易経集注」、彼が編纂を命じ、未完となった「尾張風土記」の草稿が含まれている点が綱誠の治世を語っているといえよう。ちなみに、幕末まで御文庫に綱誠の蔵書として所蔵されていた書物は、明治五年の払出しによってすべて処分されている。

2、正室新君の蔵書

一方、綱誠の夫人達、正室の新君、側室の梅昌院、やはり側室で四代藩主吉通の生母となった本寿院等の蔵書は、数では、歴代藩主達に及ぶものではないが、自ずとその地位や境遇、個性を反映していて興味深いものがある。

綱誠の正室新君（一六五四〜九二）は、綱誠とは、従兄の間柄である。新君の母京姫は、義直の娘であり、光友の妹にあたる。父は、広幡忠幸、京都の公家の出身だが、新君をはじめその妹達も名古屋で生まれ、成長している。綱誠の正室となった新君は、十三歳で、江戸の尾張藩上屋敷へ移住、元禄五年（一六九二）江戸で没した。

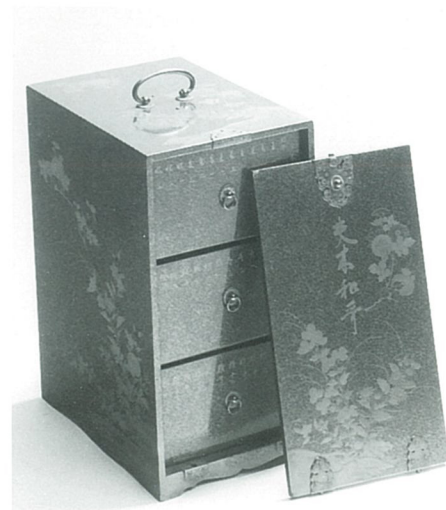
新君の蔵書は、享保十四年（一七三九）七月、享保十年になくなった六代藩主継友の正室安己君の蔵書とともに御文庫に納められた。この時期には、享保十年の江戸市谷の上屋敷の火事で、多くの道具類が焼失、各役所が保管していた道具類の再配分が行なわれている。こうした流れのなかで、保管されていた夫人達の道具類についても、用途別に分類され、書物については、いったん御文庫に納められることとなったものであろう。当時の目録には、新君の蔵書として和歌集、物語を中心に四二件六三三冊が記録されている。さらに、個々の書物についての装丁や、容器についての注記からは、梨子地や黒塗の蒔絵の容器に納められた豪華な装丁の書物が大半を占めていたことが伺われる。

大名家の夫人達の蔵書を代表するものには、女性

三代藩主の正室新君の蔵書「夫木和歌集」の写本37冊の容器である。早くに御文庫から持ち出され、後に近衛家から九代藩主宗睦に嫁いだ好君（1730〜78）の調度として使用された。

現在の容器は、「秋野」のデザインに近衛家出身者の調度に用いられる「菊折枝」の紋様があしらわれていることから、好君（近衛家久娘）の調度として使用する際に新調されたものと考えられている。

ただし、御文庫の目録は新君所蔵の「夫木集」の容器を、「梨子地秋野金蒔絵」と記し、好君の道具帳は、「梨子地秋草蒔絵」と記す。この書物箆笥が、江戸後期の新調としても、新君の蔵書の多くに付属していた梨子地や黒塗の「秋野金蒔絵」の容器の雰囲気や今に伝えているものと思われる。



梨子地秋草菊折枝蒔絵書物箆笥
(27.8×20.2×36.5cm)
（「夫木和歌集」書物箆笥）

達が婚礼の際に持参する「嫁入り本」と呼ばれる書物があり、その多くが、物語や和歌書であった。当代の能書家の筆、表紙には、金泥で花鳥風月を描いた装飾料紙や金欄を用い、一連の婚礼調度に合わせたい意匠の蒔絵や金具を施した豪華な容器に収められるなど婚礼調度の一つとして整えられたものである。目録に記された新君の蔵書には、「秋野」を描いたと

みられる同じデザインの容器に納められたものが多く、大部分がこの嫁入り本にあたるものではなかったかと思われる。

この「秋野」意匠の蒔絵の容器に納められたもののなかには「東鏡」「源平盛衰記」「帝鑑図説」などがあり、また、当時出版されたばかりの絵入百科辞典「訓蒙図彙」も記されている。武家である大名の夫人にふさわしい内容であるとともに、当時の出版界の風潮と無縁ではなかったことが伺われる。しかし、江戸後期の目録には、新君の蔵書は、五件八五冊しか記されていない。どれも調度としての利用価値の高いものばかりであっただけに、御文庫からはほとんど持ち出されてしまったようである。例えば

一、中江捨巻物語	十六冊
二、後太平記	二十二冊
三、同海録	二十冊
四、新編金鑑	二十六冊
五、新編金鑑	十二冊
六、大坂軍記	四冊
七、次書	九冊
八、寛永行幸記	八冊
九、空華和歌集	三冊
一〇、歌林金葉集	二冊
一一、歌仙大和抄	上下
一二、訓蒙図彙	八冊
一三、念仙物語集	六冊
一四、親雲上人法海集	七冊

梅昌院の蔵書目録（「御書籍目録」(寛保3年改)より）

江戸後期、「秋野」意匠の蒔絵容器入りの「夫木和歌集」「東鏡」「大平記」は、九代藩主宗睦の正室好君（一七三〇～一七八）の所用調度として道具帳に記載されている。

なお、御文庫に残された新君の蔵書は、一件が明治初年に払出されたが、四件三〇冊は、現在も蓬左文庫蔵である。また、道具帳に記載されていた方の蔵書は、「夫木和歌集」（蓬左40号参照）のみが残り、戦前の蓬左文庫設立の時点では、書籍に分類されたため、現在は蓬左文庫の蔵書となっている。

3、二の丸梅昌院の蔵書

一方、二の丸、つまり側室の筆頭の立場にあった梅昌院（一七三〇）の蔵書は、享保十五年（一七三〇）、御文庫に納められた。梅昌院自身については、京都の生まれで、尾張藩士の縁続きのものであったという程度のことが判らない。目録には、五三件五六五冊が記録されており、新君同様、和歌や物語の蔵書が多い。しかし、豪華な装飾本と思われるものは、少なく、当時出版された版本がほとんどのようである。「平家物語」「信長記」など軍記物語や歴史物語なども多く、新君と同じ「訓蒙図彙」をはじめ「武道伝来記」「諸国案内旅雀」「本朝三國志」など、当時評判の読物も含まれている。また、信仰を同わせる仏書も多い。梅昌院の蔵書も、御文庫から持ち出されているが、その数は少ない。新君のような調度用に使用されそうな書物が少なかったせいであろう。幕末まで、四七件四七三冊が御文庫に所蔵されていたが、そのほとんどが処分され、今も蓬左文庫に残るのは、「百人一首」の古写本一冊のみである。

4、四代藩主生母本寿院の蔵書

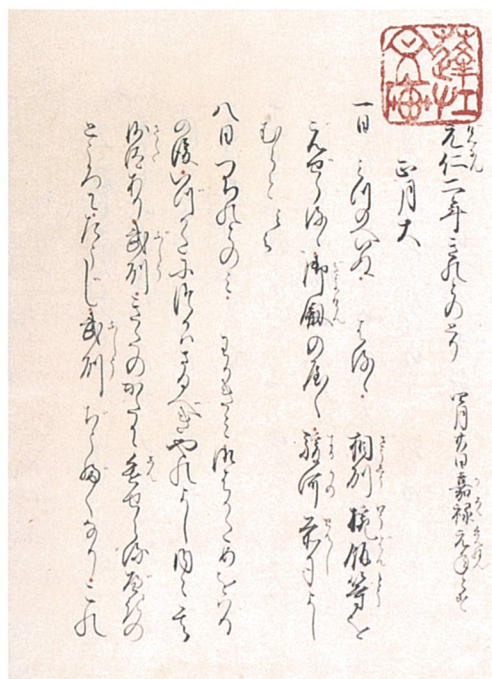
元文四年（一七三九）に没した四代藩主吉通の生母本寿院の蔵書六件五九冊は、寛保元年（一七四一）

四月、納戸方御細工所から、享保十六年に没した吉通の夫人輔君の蔵書とともに御文庫に納められた。

一方、この時、数寄屋の道具を管理している茶道方の帳面には、同じく細工方から、本寿院、輔君、泉光院（綱誠側室、六代藩主継友生母）等故人となった夫人達所用の調度が移されたことが記録されている。その内容は、どれも豪華な蒔絵などが施された調度類や、著名な書家や画家の掛け物などである。時代は宗春の華やかな時代から堅実な藩主宗勝へ移っていた。保存されていた夫人達の道具についても活用しようという、緊縮政策の一環ではなかったかと思われる。この道具帳にも、二〇件をこえる書物が記載されている。この内、本寿院所用の二つの「源氏物語」（蓬左40・50号参照）と泉光院所用の「東鏡」（解説八ページ）は、容器とともに現在、蓬左文庫に伝えられている。一方、御文庫には、本寿院の蔵書は幕末まで四件三十七冊が納められていたが、明治初年にすべて処分されている。現在の蓬左文庫に残されているのは、早くに御文庫から持ち出された二件のうちのひとつと推定される「万葉集」のみである。

ともあれ、現在残されている本寿院の書物は、尾張藩主の生母にふさわしく華麗で気品を備えている。どれも戦国から近世初期にいたる時期の名筆家の手になる優品である。もともと義直や光友の夫人達の所用品を受け継いだものであったかもしれないし、大名家などからの贈答品であったのかもしれない。本寿院は、二五〇石取の尾張藩士の娘である。主人である綱誠、息子の吉通にも先立たれた本寿院については、「尾張千姫」などという異名が示すように、あまり芳しい逸話が残されていない。しかし、残されている書物や豪華な道具類の記録からは、藩主の生母としての華やかな日常が想像されるのである。

東 鏡



東 鏡 64巻目録1巻 69冊
江戸時代初期写
(24.7×17.7cm)

一方、この豪華な「東鏡」は、目録一卷本文六四巻という珍しい巻編成である。本文の文体は、訓点付き版本を読み下せばほとんど同じだが、上記の諸本をふくめ通常の流布本にはない三年分の記事が収録されている。当時において、できるだけ完備した内容の「東鏡」をめざしたのであろう。

豪華な装丁だけでなく、その内容も將軍家の娘千代姫の蔵書というにふさわしい書物のようである。

鎌倉幕府の事績を記した歴史書として知られる「東鏡」の仮名書き本である。全冊それぞれに表紙から裏表紙に渡って、紺紙に金泥で四季折々の野山の様々な風景が見事な筆勢で描かれる。さらに金泥で波や霞が引かれた題簽には、整った美しい文字で「東鏡」と巻数、記事の年次が記されている。表紙を明けると、見返しには、葵紋の地紋のある目にも鮮やかな金箔紙が使われ、優雅な筆で仮名書きされた「東鏡」が現われる。そして、この華麗な「東鏡」の容器は、牡丹唐草の金蒔絵を施した書物簞笥である。

一八世紀半ばの道具帳によると、この「東鏡」の所蔵者は、六代藩主継友の側室泉光院であったという。しかし、さらに道具帳の筆者は、もとは、千代姫(將軍家光の娘、尾張藩二代藩主光友正室)の道具であったようだと記す。

「東鏡」といえば、家康の愛読書のひとつである。家康自ら諸本を校訂して出版、これが近世に流布した。



書物簞笥 (29×42×34cm)

様々な版本の基本となった。また、四代將軍は、「東鏡」の仮名書き下しを命じ、寛文八年(一六六八)刊行の仮名本「東鏡」のもとになったともいわれる。この寛文の仮名本は、尾張徳川家の夫人達の蔵書目録には頻繁に登場する書物でもある。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001
☎ (052) 9 3 5 - 2 1 7 3

◆交通

名古屋駅、栄より
市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行)
「新出来」下車、徒歩5分
大曽根より
JR中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間	午前9時30分～午後5時
休館日	毎月曜日、第3金曜日 祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館) 特別整理期間(2週間) 年末年始(12月28日～1月4日)
観覧	館内のみ。館外貸し出しはいたしません。
観覧時間	閉架図書 午前9時30分～12時 午後1時～5時 開架図書 午後9時30分～午後5時
複写サービス	保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行います。 電話・郵送による申込みも可。
展示	取扱い時間 午前9時30分～12時 午後1時～5時 30件程度の所蔵資料を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

「蓬左」第52号 ☆平成6年10月1日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)